

Think the Earth Paper

Think the Earth Paper

Think the Earth Paper vol.16
Spring-Summer 2020

SDGs for School

教育が変われば未来が変わる

Think the Earthは2017年から新しいプロジェクト、
SDGs for Schoolを始めました。
持続可能な社会を目指し、創造的な教育活動を行う
現場の先生や生徒たちを応援し、協働する活動です。
今号はSDGs for Schoolを通じて出会った、
教育の未来が感じられる取り組みを紹介します。

「生きている」ただそれだけで祝福される場を
認定NPO法人フリースペースたまりば

学校の「当たり前」が変わっていく
広島叡智学園

バリ島発！世界で50校を目指すサステナブル・スクール
グリーンスクール

未来をつくるために学ぶ人になろう
SDGs for Schoolの活動から

「生きている」ただそれだけで祝福される場を 認定NPO法人フリースペースたまりば

「誰も置き去りにしないーNo one will be left behind」

これは2030年までに持続可能な社会を実現するための開発目標として国連で採択された17個のゴール、

SDGs (Sustainable Development Goals) の理念のひとつです。誰も置き去りにしない社会を実現するために、私たちには何ができるでしょうか。

「居場所」とは安心して過ごせる場であり、自分らしく振る舞うことのできる場。子どもたちは家庭や学校、地域など、さまざまな人との関係性の中で成長していきます。

しかし何かしらの原因により学校に行けなくなったり、家庭状況が不安定だったり、さまざまな事情によって居場所が失われている子どもたちが多くいます。

学校に行けない子どもたちと20代の頃から向き合い、彼らの居場所である「たまりば」をつくってきた西野博之さんにお話を伺いました。

取材・文：佐藤由佳 撮影：濱津和貴

「食の営み」を取り戻し 意欲へつなげる

認定NPO法人フリースペースたまりば(以下、たまりば)は、川崎市から委託を受けて川崎市子ども夢パーク内の「フリースペースえん」を運営しています。フリースペースえんには、年齢も国籍も障害の有無も、バラバラの個性を持った人たちが集まります。ドアを開けると、ワイワイガヤガヤとした声が聞こえてきました。たまりばが大切にしているのは「暮らし」を取り戻すこと、「食」を共にすること。朝集まったメンバーは、お昼の献立を決め、買い物に向かう。お昼ごはんを自分たちでつくるのが日課なのです。

西野 現代は、暮らしの営みを、どこかに手渡してしまった社会だと思います。暮らしの基本である、ごはんをつくって食べることすら、既存のものを買ってきて食べたり、コンビニのお弁当をチンして食べたりすることが普通になっている人も多い。

最近、貧困家庭の子どもたちに出会うと、鍋や包丁、炊飯器など基本的な調理器具を持っていないと言うんです。お弁当を買って、食べて、パックを捨てる。使い捨ての食生活や孤食になっている子がたくさんいます。

ここにきて、「自分でごはんが作れるんだ」という実感を持ると、子どもたちの目の色は変わってくるんです。「もっと美味し

いものをつくってみたい」「今度はこれを試したい」。食以外のさまざまなことへの意欲にもつながります。

子どもがひとりの人間として 尊重され、自分らしくいられること

決められたプログラムはなく、過ごし方は自分次第なのも、たまりばの特徴です。ゲームに夢中になる子もいれば、外でスポーツをする子もいる。片隅で編み物をしている子もいます。

学校では、いわゆる支援学級をすすめられるような、発達障害などを持つ子どもたちもいます。しかしここでは、子どもたちのさまざまな個性は“文化”として受け入れられます。

西野 たとえば先日、ドイツから視察団がやってきて「グーテンターク」と言いながら、ドイツ人にハグをされたんですね。日本人はシャイだから、肩をすくめて「こんにちは」と言って返す。

でも、挨拶の仕方が異なるからって、ドイツ人に「日本人のような挨拶をしなさい」と注意することはないですよ。それは、親愛の情を伝えるための文化として受け入れているから。

発達障害も、子どもたちの凸凹な個性も同じです。文化だと思えば「今君はなんで叫んだの?」「食事中に足をバタバタさせては

いけません」などと、指導することはなくなります。

一方で「この子は正直手がかかる子だ」とか、「なんでこんな些細なことまで気にするんだ」とか、どうかすると怒りが湧いてしまうこともある。自分はイライラするのに、他のスタッフは笑って過ごしている。これはスタッフ同士で使った「物差し」が違ったのかもしれない。西野さんは常に子どもに否定的なことを言う前に「まずは自分の物差しを疑う」ことをスタッフにも伝え、大切にしているそうです。

西野 発達障害や困った子と言われてしまう子どもたちは何をもって「障害」とされるのか、考えるんです。大人が持っている「普通これくらいできるよね」の物差しで見ること、その子の面白い部分、すごい力を見逃してしまうことがあると思います。

さっき大声で騒いでいる子がいたと思うんですが、ご両親にうかがったら、先日海外に行った時に見知らぬ外国人といきなり話しを始めたそう。誰とでも打ち解けられる、コミュニケーションをとれる力があれば、どこに行っても大丈夫だと思うんです。だからこの子が持っている力はすごい。

西野さんは、その子なりの固有の文化を受け入れ「この子には必ず何か光る部分があるはずだ」と信じているのです。

フリースペースの室内には「子どもの権利」が掲げられています。これは「川崎市子どもの権利に関する条例」に記されている、以下7つの大切な権利です。

- ・安心して生きる権利
- ・ありのままの自分でいる権利
- ・自分を守り、守られる権利
- ・自分を豊かにし、力づけられる権利
- ・自分で決める権利
- ・参加する権利
- ・個別の必要に応じて支援を受ける権利

国連で定められた「子どもの権利条約」がもととなっており、同条例のもとに設置された川崎市夢パークは“子どもについての約束を実現する場”として、子どもと大人が一緒につくり上げていく施設。フリースペースえんのほかにも、ログハウスやサイクリングロード、全天候広場などがあり、学校に行っている子も、行っていない子も、川崎市内外から多様な子どもたちが集まり、居場所となっているのです。

学校に行けないことが 「死」につながってはいけない

子どもたちを丸ごと受け入れるような「たまりば」の空気感。それはどんな背景・想いのもと始まったのでしょうか。

西野さんが「たまりば」としてフリースペ



外には「川崎市子ども夢パーク」に集まる子どもも混ざって、自由につくりかえられる遊び場がある。子どもたちの自主性を大切にし、禁止や制限を極力なくしている



ースを始めたのは1991年(のちに川崎市から委託を受けて、現在は川崎市子ども夢パーク内「フリースペースえん」を運営)。

多摩川のほとりにアパートを一室借り、学校に行けない子どもたちが集う場にしました。当時、いわゆる不登校の子どもたちへの眼差しは今よりも格段に厳しく、「甘えだ」「逃げだ」といった考え方が主流だったと言います。たまりばを始めたきっかけとして西野さんは、ひとりの小学生の男の子との出会いを教えてくださいました。

西野 小学校1年生のシュンくんは入学前から学校生活を楽しみにしていました。ところが入学して1ヶ月、学校に行こうとするとお腹が痛くなってしまい、とうとう足がもつれて倒れてしまうんです。

彼は大粒の涙を溜めながら言いました。「僕もう大人になれない」。

学校のほかの友達は2年生、3年生、中学校へと進学していくけれど、学校生活の「一段目」を踏み外してしまった自分は、もう大人にはなれないのだと。



認定NPO法人フリースペースたまりば代表の西野博之さん

「学校に行けなくなったら人生終わってしまうのか?そんなはずはないだろう」と、西野さんはそのことがずっと気がかりだったと言います。

辛い家庭状況を教えてくれた中学生の女の子の話も伺いました。

西野 中学2年生のマユミは、布団をかぶって泣いてばかりいました。お母さんが布団を剥がして「学校に行きなさい」って言うんだけど、どうしても布団から出られなかった。

お母さんは「私どこで子育て失敗しちゃったのかしら」と嘆くわけです。彼女は「私って失敗作なの?生まれて来ない方が良かったの?」と訴えます。お母さんはお父さんに「あなたからも、何か言ってちょうだい」と救いを求めます。

しかしお父さんからの一言は「お前がだらないからだ!お前が甘やかしたから学校も行けない、でき損ないになったんだ、そこへお舅さんが「嫁が悪い、嫁が悪いからこんなことになっている」と追い打ちをかけるんです。追い詰められたお母さんはマユミを連れ出し、無理心中を図りました。

学校に行けないことが「死」につながる。やり切れない思いが溢れました。幸いこの親子は命を取りとめました。可能性に満ち溢れた未来があったはずの命が、学校での困難や厳しい家庭環境によって失われていることは事実です。

西野 学びの場って学校だけではないんです。でも現在の日本社会では、学校に行けないことが「死」につながってしまう。何人の子が死んでいったか。僕らが直接関わった中でも、悔しいけれど救えなかった命は、片手じゃ足りません。

「生きてるだけでOKじゃん」 ただそれだけで祝福される場を

今日、子どもたちがここまで、どんな不安や辛さを抱えてきたのか。厳しい家庭状況や精神状態の中でかろうじて電車に乗れたのかもしれない。「あの子はなんで学校に行かないんだ?」という険しい社会の視線をかいくぐって、たどり着いたのかもしれない。そんな想像力をはたかせながら子どもたちと向き合い、場をつくる西野さんですが、たまりばを始めた当初、子どもたちから教えられたことがありました。

西野 たまりばを始めたばかりの頃は「少し勉強をやらせないといけないな」とか「見てくれとしてはこうしておいた方がいい」とかって思っていたんです。だから勉強道具を置いたりもしていた。でも子どもたちは察がいいので、勉強道具とかが並んでいるのを見つけると、「やべえ」となるわけです。

当時は6畳間でしたから、彼らは押入れの中に入って天井板を外して、天井裏に隠れました。そして、蜘蛛の巣がかかった天井裏の掃除を始めたんです。二週間後、見ていいよ、と言われ恐る恐るのぞいてみた。すると、小学生の女の子が「ここが私たちの居場所よ」って笑顔で言うわけです。

その時ガツンとやられましたね。勉強させなきゃとか、遅れを取りもどさせようとか、大人が「良かれ」と思って差し出すメニューが、いま目の前の子どもをさらに追いつめることもある。丸ごとの命を、生きていだけでハッピーと受けとめられてはいなかったなと思って。

その子が何をやりたいのか、何をやりたくないのかをキャッチすること。安心して「や



りたいことをできる場」を保証することが重要だと言います。どんな突飛な行動だとしても、モヤモヤするのは大人の問題なのだと西野さんは語りました。

子どもたちの命の声により添い「やりたいことができる場」を保証するには、同時に「何もしないこと」を保証する必要があると言います。やりたいことが出てくるまで待てるかどうか。そして子どもたちの光る部分を「面白がれる大人」でいられるか。安心できる空気感のもと、本気で向き合ってくれる大人の存在が大切なのだと、西野さんのお話から伝わってきます。

西野 「君と出会えたこと幸せだよ」「生きてるだけでOKじゃん」って心から伝える。そういったものが子どもの心に注入されていけば、子どもたちは自ら欲をもって、自分で動き始めるんです。それだけがこのベースにあります。

本稿はウェブマガジン「think」のコーナー「地球レポート」に2019年5月29日に掲載された記事を改訂したものです。
<http://www.thinktheearth.net/think/2019/05/npotamariya/>



学校の「当たり前」が変わっていく 広島叡智学園

持続可能な社会創生のために、創造的な教育を実践する現場の先生と生徒を応援するプロジェクトSDGs for School。その活動の中で出会った型破りな公立校が、2019年4月に誕生した広島県立広島叡智学園(以下、叡智学園)です。広島県立としては初の、全寮制・中高一貫教育校で、初年度の志願倍率は9倍。いったいどのような学校なのでしょう。

取材・文：笹尾美和子 撮影：上田壮一

広島駅からフェリーを乗り継いで約2時間。瀬戸内海に浮かぶ離島、大崎上島に叡智学園があります。校舎は1階建ての広々とした佇まいで、同校の設計は、学校建築を中心に国内外で高い評価を受けている株式会社シーラカンズ アンド アソシエイツと土井建築設計共同体によるもの。一見すると「ここは学校なのだろうか?」と思う外観です。

オープンスタイルの広い校内に戸惑い、生徒さんに「職員室はどこですか?」と声をかけると「こちらですよ!」と、にっこり笑顔で教えてくれました。

デザインされた空間とカリキュラムが、新しい教育を支える

我々の到着を待ってくださっていたのは、今回の案内人、徳田敬先生。さっそく案内していただいたのは、フリーアドレス制の職員室です。IT企業のようなオープンな風景が広がる職員室。半分クロズドなミーティングスペースがあったり、個人作業ができる場所があるなど、随所に工夫があり、自然と教員同士のコミュニケーションが生まれやすいように設計されていました。

職員室を出て「学びの回廊」と呼ばれる渡り廊下へ。ここは、すべての教室へとつながっています。まず案内していただいた教室棟のF・L・A(フレキシブルラーニングエリア)には「オープンで広々とした教室」と、テストなど「集中した作業向けの教室」の2タイプがありました。

取材日、オープンな教室で行われていたのは、数学の授業。教科担当と英語ネイティブの教員2名が付き、「英語で」授業が行われます。生徒たちはホワイトボードを前に「数式を、英語で説明する動画制作」のための議論を行っていました。生徒同士の議論も英語でやりとりされ、先生と生徒、生徒同士が対話を重ねる。そんな様子が印象的でした。



上) 学びの回廊。ここから、すべての教室につながっている
下) ホワイトボードの前で英語でディスカッションする生徒たち

特徴的なカリキュラムは他にもあります。「未来創造科」では、WELL-BEING(幸福)、ENVIRONMENT(環境)、GLOBAL JUSTICE(社会正義)の3つのテーマについてプロジェクトベースで学びます。中学1年生の最初のテーマはWELL-BEING。島の人にインタビューし、その人の人生の中のWELL-BEINGを教してもらい、発表をします。インタビュー交渉や発表方法などは全て生徒たちが考え、実施。そして最終的には「この島のウェルビーイング(幸福)は何か」を表現するそうです。



広島叡智学園中学校・高等学校 徳田敬教諭

生徒たちの「やりたい」を見つけるための挑戦

国際バカロレア(IB)のディプロマ資格課程が設置されている叡智学園では、今後、段階的に他教科の授業も英語で行ったり、中学校の段階から留学生を受け入れていく予定です。英語教育と生徒の卒業後の進路について、徳田先生に聞いてみました。

徳田 「IBを取得することは、子どもたちの『選択肢を増やすこと』だと考えています。必ずしも海外の大学を目指してほしい、ということではありません。

『世界の課題を解決するためにNGOで活動したい』という希望があれば、大学に行かずNGOに就職してもいいと思いますし、いきなり起業してもいい。私たちは、ここでの6年間の学びで子どもたちそれぞれが本当にやりたいことを見つけてほしい、という思いが強いです」

全員寮生活を送る、叡智学園の生徒たち。取材時点では1学年ですが、今後は多学年、多国籍の生徒が集まり、寝食を共にすることに。気持ちよく生活するために、寮や学校のルールは「生徒たち自身が決めていく」そうです。叡智学園には校歌も校章もまだなく、これから生徒と一緒に作る過程に「新しい価値を創造できる能力」を身につけるといふ学校のビジョンが体現されています。徳田先生に「これまでの公立学校と叡智学園で、大きく異なることは?」と聞いてみました。

徳田 「子どもたちが主役になれる環境で、新しい価値を創造する力を育てることを重視し、『失敗を許容する文化』を大切にしている点

だと考えています。例えば生徒が「時間を守れなかった」とき。教員は『ルールを守りなさい』と叱るのではなく、なぜ時間を守らなければならないのか、子どもたちが自分自身で考えられるように力を注ぎます」

生徒と共に現在地を確認し“達成度合い”の見える化を

叡智学園ではテストも実施しますが、ポスター発表やプレゼンテーション、エッセイなど、さまざまな成果物を元に、生徒たちを評価します。「テストの点数で生徒の評価を決めることは成績をつけやすい反面、実際に子どもたちが『どこまで理解し、どこでつまづいているのか』が分かりづらい」のだといいます。

IBの評価方法には、フォーマティブアセスメント(学びの途中の形成的な評価)と、サマティブアセスメント(最終的な単元の総括的評価)があり、評価は0~8まで。「どこまで到達できたか」を見える化するのが特徴です。

例えばポスターセッションが「最終目的」だとしたら中間発表を設けて、生徒が課題に対して「今どれだけの理解と準備ができているのか」「次のレベルに上がるためにはどうしたらいいのか」を、生徒と先生と一緒に話し合います。すると、子どもたち自身も納得

して評価を受け入れ、次は何をすべきかがはっきり分かるのです。この特徴的な評価方法について、徳田先生はこう話します。

徳田 「IB形式の評価については、教員も初めてのことです。そのため、日々生徒と一緒に学びながら実践しています。また、子どもたちにとってより良い環境を創り上げるためには、『教員側のマインドのつくり方』も大きなチャレンジのひとつです。この学校の設立に関わるようになってから『どのような学校文化をつくっていけばよいか、授業のスタンスはどうすればいいか』など毎日のように議論の中で、私自身のマインドも変えていきました」

ITやテクノロジーの進化により、10年後がどんな世界になっているか、誰も分からない時代になりました。答えのない未来が待ち構えているからこそ、これからの子どもたちには「新しい価値を創造できる能力」が必要です。しかし、それを育むには「こういう教育をすればいい」という決まったルールや方程式はありません。教える側もまた手探りで、生徒と一緒に考え、動いて、学んでいくことが大切なのではないでしょうか。

本稿はウェブマガジン「think」のコーナー「地球レポート」に2019年10月7日に掲載された記事を改訂したものです。
<http://www.thinktheearth.net/think/2019/10/higa-report/>



ひと目で全体を見渡せる職員室。机の上はスッキリしていて、仕事が捗りそうだ



大きな窓から入る日差しが気持ちのよいオープンな教室



完成予定図。2020年4月には体育館、理科室、図書館等がオープンし、学校はほぼ完成。2期生も入学してくる(提供:広島叡智学園)

バリ島発! 世界で50校を目指す サステナブル・スクール グリーンスクール

サステナビリティをテーマに教育を行うバリ島の

「グリーンスクール」には幼稚園から高校まで世界40カ国から

およそ500人もの子どもたちが集まります。2020年にニュージーランド、

2021年には南アフリカとメキシコにグリーンスクールが開校予定。

世界で50校を目指しています。いま、世界に広がっている

「サステナブルな社会をつくるための教育」の現場取材しました。

取材・文：笹尾実和子 撮影：上田壮一 協力：河本雄太

デンパサール空港から車で約1時間。グリーンスクールの校舎は、バリ島の中心街のひとつ、ウブドから少し離れた熱帯雨林の中。毎日実施されるツアー（有料）には、世界中から多くの参加者が集まります。

まず目を奪われたのは、全体が「竹」でつくられた美しい校舎。バリで育った大きな竹が使用されています。校舎だけでなく、机、椅子などさまざまなものが竹で作られています。自然光や風が通る、とても気持ちのよいオープンな空間が広がっていました。

グリーンスクールでは、学校の施設内で資源が循環するシステムづくりを目指しています。ごみはゼロ、電気も水も100%自給自足を目指しているのです。キッチンで使われるのはオーガニックなココナッツオイル。近所のロコファーマーと協力して作る野菜やお米、ベジタリアンフードの用意もあります。校内のソーラーパネルや水力発電は、使用電力のおよそ60%を賄い、食、水、エネルギー、ごみなど生徒たちの発案で、校内の「しくみ」がどんどん進化していく。それがグリーンスクールの大きな特徴です。

「ごみは資源だ」 21種類に分別したごみから 作品づくり

グリーンスクールには、ごみ問題に取り組むプログラム「Kembali（ケンバリ）」があります。「Kembali」とは、インドネシア語で「戻る」という意味。地域を巻き込みながら、ごみを「資源」として新しいモノにつくり変えていきます。

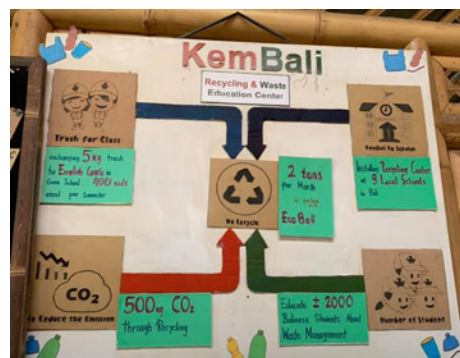
バリ島で深刻な問題となっている、プラスチックごみ。現在、1日に4千トンのプラスチックごみが埋め立て地に運び込まれ、このままでは5年間で埋め立てる場所がなくなってしまう予測もあります。インドネシア全体ではプラスチックのリサイクル率は7%と非常に低く、国としても大きな課題になっています。

グリーンスクールの生徒たちの朝は、ごみの分別から始まります。校内にあるリサイクル施設にごみを持っていき21種類のカテゴリーに分別。EcoBaliという団体と連携して、資源の再生をしています。近隣の9つの学校の生徒を対象に、ごみを5kg持ってくると放課後の英語の授業に3ヶ月間無料で参加することができるプログラムもあります。このプログラムのおかげで地域のこ

みが集まりやすくなり、地域の子どもたちも「ごみは資源だ」と実感できる仕組みになっているのです。現在は月に1.5トンのごみを集めているそうです。

グリーンスクールでは日常的に、生徒自らが手を動かして、モノをつくり出します。校内には、学校の設備とは思えない最新の機械が揃った工房スペースもあります。

たとえばペットボトルのキャップを溶かして3Dプリンタ用のフィラメントをつくり、生徒たちがデザインしたプロダクトを試作。ソーラーパネルの電力で走る船や、ハーブでエッセンシャルオイルをつくったりもしています。つくった製品が「いかに長く使えるか」ということも重要なポイント。生徒がイノベーションを起こすためには、さまざまなプロトタイプをつくり、トライ＆エラーを繰り返すことが重要だと担当の先生が教えてくれました。



「KemBali(ケンバリ)」プログラムの説明図

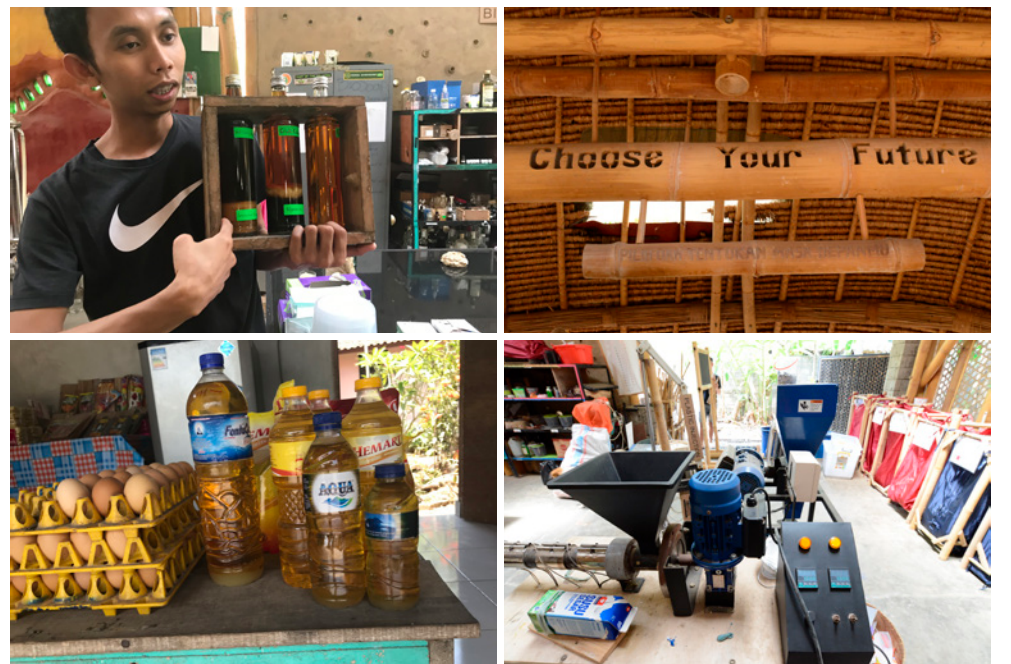
パームオイルの 再利用問題にアイデアを。 生徒の発信で「しくみ」が変わる

グリーンスクールの生徒たちは、バリ島の家庭の台所で発生する環境課題に対しても取り組んでいます。バリの料理は、ナシ・ゴレンやミ・ゴレンなど、ほとんどがフライ料理。調理にはヤシ油（パームオイル）が使われています。パームオイルは、インドネシアの家庭、ホテルやレストラン、屋台などで日常的に使われており、使った油は下水から川へ、そして海に流れ込み、生態系に大きな影響を及ぼしています。

もうひとつの知られざる問題は、「劣化したパームオイル」がブラックマーケットで再販売されていること。酸化により劣化した油を塩素で漂白し、新しい油としてペットボトルに詰めて売られているのです。漂白された質の低い油は、血管を詰まらせ、脳梗塞を引き起こす恐れがあります。しかし、通常のパームオイルの半額（1リットル40セント）ほ



いつでも自然を体感できる校舎。まるでプライベートヴィラにきたような心地よさ



左下) 左の黒いビンが使用済みの酸化したパームオイル。これを分離させてきたのが、右のバイオオイル 右上) グリーンスクールに入ってすぐの場所には「Choose Your Future」の文字。未来は自分で選ぼう、という力強いメッセージ 左下) お店で売られていたパームオイル。AQUAはミネラルウォーターのブランド名です。こうしたペットボトルに入っているパームオイルは漂白されている可能性がとても高い 右下) プラスチックを分解する機械。そのほか3Dプリンターやレーザーカッターなども揃っている

どの値段で売られているため、一般の家庭や小さな食堂などで使用されています。この問題は、マレーシアや中国でも起こっているそうです。

そこでグリーンスクールでは、40以上のレストランやホテル、大学とパートナーシップを組み、使用済みのパームオイルを10リットル1.5ドルで買い取り、バイオディーゼル燃料に変えて利用。「バイオバス」と呼ばれるスクールバスの燃料として使っているのです。

バイオバスのアイデアは、生徒から発案されたもの。現在は6つのルートを複数のバスが走り、朝と夕方は生徒とスタッフを送り迎えし、昼間は地域住民が乗れるコミュニティバスとして運用されています。スクールバスに活用することで、生態系への影響を低減するだけでなく、生徒の送り迎えに使われる燃料代も節約でき、運賃から利益を得るなどビジネスとしても成功しています。

グリーンスクールのさらなる挑戦。 アイデアの実現に力を貸す ファシリテーターの存在も

使用済みの油からつくられるバイオディーゼル燃料は、ディーゼルエンジンには使えませんが、インドネシアは、ガソリンで走るバイクが主流。そこで、生徒のひとりがバイクでも使えるバイオガソリンがつかれないかと考えました。グリーンスクールには500人の生徒と200人のスタッフがいて、毎日学校

でご飯を食べています。その食べ残しを発酵させて、バイオエタノールをつくりました。現在はこのバイオエタノールからバイオガソリンをつくることに挑戦中です。

今はまだ少量ですが、純度の高いバイオガソリンをつくることにも成功。ゆくゆくはファンを募り、生産量を増やして販売を始める計画です。使用済みの油から、バイオエタノール、バイオガソリンをつくり活用を目指すこのプロジェクトは、スウェーデンとフィンランドのaward「Children's Climate Prize」を受賞しました。その賞金を充てて、さらに改良しようと考えているそうです。

グリーンスクールでは、生徒の「やりたい!」という声や疑問からアイデアが生まれ、新たなプロジェクトが動き出しています。教師の中には生徒に教える立場だけでなく、ファシリテーターとして「彼らのアイデアの実現に力を貸す」役割の人もいます。そのため、グリーンスクールの子どもたちは次々にチャレンジングなアイデアを生み出すことができるのです。

生徒の主体性を徹底的に考え、引き出し、現実社会の課題解決と生徒自身の学びを両立させる学校は、サステナブルな未来を創造する大きな力になるでしょう。

本稿はSDGs for Schoolのウェブサイトにて2019年12月27日に掲載された記事を改訂したものです。
<http://www.thinktheearth.net/sdgs/2019/12/27/greenschool-report/>





未来をつくるために学ぶ人になろう

SDGs for Schoolの活動から <http://www.thinktheearth.net/sdgs/>

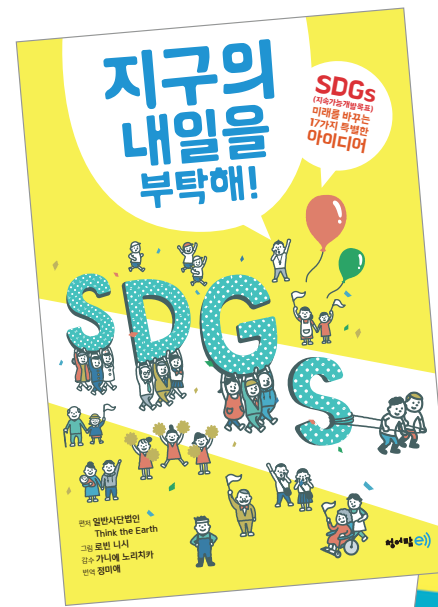
SDGs for Schoolは、持続可能な未来をつくるために創造的な教育活動を行う先生や生徒の「学びから行動まで」を応援するプロジェクトです。「SDGsを知る」ための教材づくりや講座の実施、「SDGsを体感する」スタディツアー、「SDGsでつながる」交流会やイベント、「SDGs達成に向けて行動する」子どもたちの自発的な活動の応援など、多彩なプログラムを推進しています。

書籍

『未来を変える目標 SDGsアイデアブック』

(監修: 蟹江憲史 発売: 紀伊國屋書店)

インフォグラフィックや写真、マンガなどを使い、17個の目標の説明、優れたアイデアに焦点を当てた世界の活動34事例を紹介。また、環境問題や金融、福祉、テクノロジーの専門家など14名の執筆者の解説やコラムも掲載しています。毎年学校に本書を40冊ずつ寄贈するプログラムを実施するほか、市販版はSDGsの入門書として広く読まれ、発行部数は5万部を突破。2019年に韓国版、2020年に台湾版が刊行されました。中高生による「英語翻訳プロジェクト」も生まれ、全国から53校、約300人の生徒が参加しました。現在、非公開ですが学習成果としての「英語版」の制作も行っています。



冊子

地域版アクションブックほか

書籍の姉妹版となる冊子も次々に誕生しています。内閣府が指定する「SDGs未来都市」に選ばれた神奈川県とのコラボで、県内のローカルな活動を紹介する『SDGsアクションブックかながわ』、『SDGsパートナーブックかながわ』を制作。佐賀県では認定NPO法人地球市民の会とともに『SDGsアクションブックさが』をつくりました。高校生がSDGsを入りに学部を選択するヒントとなる冊子『わたしと未来をつなぐSDGsワークブック』は関東学院大学とともに制作しています。2020年度には地域のアクションブックを自分たちでつくれるウェブサービスも開始します。



各冊子PDF版はこちらをアクセス!

<http://www.thinktheearth.net/sdgs/booklet/>



講座

SDGs for School 認定エドゥケーター講座

(共催: 朝日新聞社)

SDGsの本質を知り、それを伝えるスキルをもった人を育てよう!と、2019年から朝日新聞社との共催で「SDGs for School認定エドゥケーター講座」をスタート。2020年3月現在、約200名のエドゥケーターが誕生しています。仙台、大阪、熊本など東京以外でも開催しました。

撮影: 鈴木智哉



交流

ティーチーズギャザリング

全国から集まった教員たちが、学校現場でどのように「持続可能な社会」をテーマにした教育を行うのかを学びあう場です。社会行動を行う企業や生徒も参加し、参加者曰く「トイレに立つのがもったいない」くらい、毎年刺激と熱気に満ちた2日間になっています。

体験

中高生ボルネオ島スタディツアー

教室や会議室を飛びだそう！SDGsを自分ごととし、行動するためには環境問題や社会問題の現場で一次情報に触れる機会が極めて重要です。そこでSDGs for Schoolは、有志の教員が始めた「中高生ボルネオ島スタディツアー」に2018年から参画。毎回生徒20名、教員10名が参加し、事前学習を経てボルネオ島を訪ねます。見えない油と言われるパーム油の問題を、生産現場であるアブラヤシのプランテーション訪問のほか、熱帯雨林探検や現地の学生との交流など、さまざまな体験をしながら学ぶフィールド授業です。帰国後の事後学習を経て、子どもたちが次々に行動を開始しています。



写真提供：シブヤ大学



協働

私たちのSDGs

(シブヤ大学×Think the Earth共同企画)

東京・渋谷のまちを大学のキャンパスに見立てる、市民のための市民による学びのプロジェクト「シブヤ大学」と協働で、SDGsをテーマに3回の連続講座を行いました。1回目のテーマは「そもそもSDGsって何だろう?」。SDGsの基礎的な知識や歴史的な背景を学び、自分自身とSDGsの関係性を考えていく基礎編。2回目の「SDGsリテラシーを身に付けろ!」では朝日新聞が提供するSDGsの観点で新聞記事を読み、思考を見える化するワークショップを体験。3回目は「消費とSDGs:行動をはじめよう」と題し、ボルネオスタディツアーに参加した学生が先生になって、身近な消費からサステナビリティについて考える時間となりました。ボルネオ島で現場体験してきた子どもたちの発する生き生きとした言葉や行動力に心を動かされ、「未来のことを前向きに考えるきっかけとなった」「大人も子どもに負けずにアクションしなければ」など、参加者から具体的な行動に向かう意気込みがたくさん聞かれました。

行動

超文化祭

みらいをつくるソーシャルアクションフェス

子どもたちが中心になって2018年から「アースデイ東京」に出展を続けてきました。そんな中、「持続可能な未来をつくることをテーマに、学校を超え、世代を超えた文化祭があってもいいよね」というアイデアが生まれ、2019年12月22日、東京・新宿区にある新渡戸文化学園を会場に「超文化祭」が実現しました。「ゴミを出したくない」という子どもたちがチケットレスの入場システムを自らつくったり、「誰も置き去りにしない制服」をつくりたいという想いから企業を巻き込んで行動する「学生ブランドつくっちゃおうぜ!」チームがブース出展したりするなど、子どもと大人と一緒に未来を目指すプロジェクトの数々が発表されました。



みらいをつくる
ソーシャル
アクションフェス



ウェブ

活動のあれこれを情報発信中!



SDGs for Schoolのウェブサイトでは「書籍を学校に寄贈するプロジェクト」「教材のご案内」「世界の学び場からの最前線レポート」「講座やセミナー、ワークショップ」などの情報発信を行っています。SDGsは「知る」だけでは意味がありません。知るから始まり、体験し、つながり、行動するまでのプロセスをSDGs for Schoolは全力で応援したいと思っています。まずはメール登録、ツイッターやfacebookのフォローなどお気軽に参加いただければ幸いです。

ティーチャー登録

SDGs for Schoolコミュニティにご参加ください

学びの場を持つ指導者を対象に、参加可能なイベント情報や、実践に役立つ情報を不定期で配信しています。情報を受けとるには下のQRコードにアクセスしてティーチャー登録をお願いします。2020年3月現在、約1300名が登録しています。その他、詳しい情報はウェブサイトをご覧ください。

ティーチャー登録はこちらをアクセス!

<http://www.thinktheearth.net/sdgs/teacher-entry/>





抜粋版

Think the Earthのウェブメディア thinkの地球ニュースでは、世界各地のリポーターが気になったニュースやオススメ情報を随時発信。その中から最近アップされた記事の一部を紹介します。ニュース全文はウェブでどうぞ！
<http://www.thinktheearth.net/think/news/>



Pinterestでシカゴのホームレスに関心を 宮原桃子

画像を検索・保存するウェブツール「Pinterest」を使った斬新なキャンペーンで注目を集めたシカゴのホームレス支援団体「ナイト・ミニストリー」。「ベッド」「コート」などと検索すると、おしゃれな画像の中にシカゴに暮らすホームレスのベッドや服などが現れ、画像をクリックすると寄付サイトにつながる仕組みです。大手広告企業ビュブリス・サビエントが、同団体への支援の一環として制作。「Selfless Pins」と名付けられたキャンペーンは、月21万人以上のページビュー

を集めて寄付金は322%増となりました。数年前、アフガン難民の母子が道中の雪山で凍死したニュース報道を耳にした後、子どもたちと温かい湯船に浸かったとき、我が子を温めて救いたかったであろう母の気持ちが自分に重なって胸が締め付けられました。Selfless Pins（誰かのためのピン）と名付けられたこのキャンペーンのように、ホームレスの過酷な日常に自分を重ね合わせて想像できたとき、境界線を引いていた彼らの境遇を身近に感じられるのかもしれない。



近未来のショッピングは使い捨て容器不要! 岩井光子

2019年1月のダボス会議で、使い捨て容器自体をなくす未来のショッピングシステムとして発表された「LOOP」。数十のグローバル企業が参加表明したその仕組みとは、かつての牛乳配達をほうふつさせる宅配サービス。消費者がオンライン注文した製品が、繰り返し使える耐久性のある容器に入れられ、専用のバッグで自宅に届きます。容器洗浄はスタッフが回収後に行うので、そのまま返却でき、再び中身が充てんされた商品が届きます。システムを取りまとめる米のリサイクルベンチ

ャー、テラサイクルは5月からニューヨークとパリで先行試験サービスを開始。企業側も消費者の動向を注視しているところです。2020年には東京でもLOOPが始まります。「サーキュラーエコノミーを確立させるためには、より多くの消費者に選んでもらえる商品やサービスである必要があります」と日本支社の片山亜沙美さん。容器の廃棄や洗浄の手間が省ける便利さや使い勝手をうたい、環境意識の薄い消費者にも広く魅力を感じてもらえるビジネスモデルを試行錯誤中です。



香港の水田に「コメを食べる鳥」を呼び戻せ 山田由美

かつて中国南部で捕獲しすぎて絶滅寸前に追い込まれたシマアオジ。この鳥が渡りの途中に立ち寄り中継地や越冬地は稲作地帯。秋に飛来して米を食べることから害鳥として一網打尽に捕獲され、「米の鳥」と呼ばれたこの鳥を食べるお祭りすらありました。シマアオジにとっての脅威は人間の捕獲と水田という生息地の喪失。香港野鳥会と地元NGOが北部のロングバレーで2005年、豊かな水をたたえる氾濫原で水田を営み、シマアオジを迎えるプロジェクトをスタートさせ

ました。開始時には230だった鳥の数が、2019年には317まで上昇。鳥だけでなく両生類、昆虫を含む生物相の豊かさが増し、生物多様性が向上。農家だけでなく地域全体のコミュニティがかかわるようになり、シマアオジの生息環境に配慮した有機米の栽培という新しい経済活動も見えてきました。香港野鳥会が科学的にこの成功を定量化するため、足環をつけてシマアオジの追跡調査を行ったところ、この地が安定的な中継地として使われていることも判明しました。



コロナ危機でドイツから広がる助け合いの輪 河内秀子

世界で広がる新型コロナウイルス感染症。ドイツや周辺国では危機を逆手にとって人と人との結びつきを強めるチャンスに変えよう!という動きが起こっています。例えば、ウィーン在住の女性はツイッターで#NachbarschaftsChallenge（ご近所チャレンジ）のハッシュタグをつけ、「65歳以上、もしくは免疫力が低い方へ。私たちは感染リスクが高くないから、買い物とか手伝いますよ!」と貼り紙をアップ。また、隣人同士をつなげるアプリnebenan.deは、リモ

ートワークへの切り替えが難しい親が、交代で休校中の子どもの面倒を見合うグループをつくるのに使われています。ベルリンでは休校中の15歳の学生が、サポートしたい人とサポートを求める人をつなぎたいと考え、ポータルサイト coronaport.net を開設! 「不安になる人も多いと思いますが、自分に何かできることがあると安心するようです」と話すのはnebenan.deの創立者のひとり、イナ・レマーズさん。一緒にパンデミックを乗り越えようという強い意志が心強く感じられます。

Information



東日本大震災「忘れない基金」から4団体に寄付を実施しました

2011年3月11日14:46に発生した東日本大震災から9年。かつての被災地は、毎年訪れるたびに鉄道や道路が復旧し新設され、新しい町並みができています。そこには目に見えないけれど、たくさんの人の想いや積み重ねてきたものが詰まっているのだな、と思います。この度「忘れない基金」から、岩手県、宮城県、福島県で、映画や音楽、海遊び、そして集いの場づくりを通じて、復興支援を行なっている4つの団体に寄付を行いました。どの活動も、目には見えない気持ちに寄り添ったとても大事な活動です。

「忘れない基金」には、私たち自身がいつでも自然災害の被災者になる可能性があることを「忘れない」という意味が込められています。その言葉の通り、この9年間は大きな地震や水害が毎年のように起きています。2021年、震災から10年を節目に、忘れない基金は終了予定です。基金を閉じるにあたって、寄付をした各団体のその後を振り返って、これからの私たちの「いつか」を考える機会を持ちたいと考えています。(原田麻里子)
<http://www.thinktheearth.net/jp/wasurenai/fund/>



みやこ映画生活協同組合が行なっている上映会。災害公営住宅に住んでいる方に限らず、地域の方々が一緒に楽しんでいる

寄付先団体 (2020年3月)

- みやこ映画生活協同組合(岩手).....¥300,000
- あじ島冒険楽校(宮城).....¥300,000
- 一般社団法人エル・システムジャパン(福島).....¥150,000
- 特定非営利活動法人つなごっぺ南相馬(福島).....¥150,000

Think the Earth

www.ThinktheEarth.net/jp



一般社団法人Think the Earthは「エコロジーとエコノミーの共存」をテーマに2001年に発足したNPO(非営利団体)です。クリエイティブやコミュニケーションの力で、日常生活のなかで地球や世界との関わりについて考え、行動する、きっかけづくりを行っています。環境や社会問題への無関心とあきらめの心こそ最大の課題ととらえ、ウェブサイトや書籍などで情報発信を行っているほか、企業やNPO、クリエイターとともに誰もが参加できるプロジェクトを開発・提供しています。

2019年度パートナー企業(2020.3.31現在 五十音順)

- SDGs for Schoolの活動は以下の企業の協賛・協力により推進しています。
- | | | |
|-----------------|-------------------|----------|
| 株式会社ウェルネスフロンティア | 野村不動産ホールディングス株式会社 | 三菱製紙株式会社 |
| 株式会社NTTデータ | 野村ホールディングス株式会社 | ヤフー株式会社 |
| サラヤ株式会社 | 不二製油グループ本社株式会社 | ライオン株式会社 |

発行●一般社団法人Think the Earth 〒150-0034 東京都渋谷区代官山町9-10 co-lab代官山6R01
 TEL 03-3464-5221 FAX 03-5459-2194 E-mail tte-office@ThinktheEarth.net
 発行日●2020年3月31日
 編集統括●上田社一 編集●佐藤由佳 岩井光子 制作●曾我直子
 デザイン●武田英志 小島花恵 中村衣里(hoop) 印刷●株式会社大川印刷

Think the Earth Paper PDF版(カラー)
 バックナンバーも下記ウェブサイトにて閲覧できます。
<http://www.thinktheearth.net/jp/ttepaper/>

